児童・生徒のサポートの互恵性と精神的健康との 関連に関する縦断的研究

広島大学 谷口弘一・浦光博

A longitudinal study of the relationship between support reciprocity and mental health among elementary and high school students

Hirokazu Taniguchi (*Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima 739-8521*) and Mitsuhiro Ura (*Department of Integrated Arts and Science, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima 739-8521*)

At both the beginning and the end of a school year, 124 sixth-year elementary school students and 242 first-year high school students completed questionnaires regarding mutual support in friendships and stress responses. For elementary school students, support reciprocity did not correlate significantly with stress responses at either the beginning or end of the school year. For high school students, support reciprocity related significantly to stress responses at the end of the year but not at the beginning. These results suggest that the relationship between support reciprocity and mental health is influenced by the developing relationship between two people as well as the state of each individual's development at the time of mutual support.

Key words: social support, support reciprocity, stress responses, elementary school students, high school students.

これまでのソーシャル・サポート研究の多くは、主として、受け手の側の視点に立って、他者から受け取るサポートが心身の健康に対してどのような役割を果たすのかについて検討を行ってきた (Barrera, 1986; Cohen & Wills, 1985)。一方、近年では、ソーシャル・サポートが社会的相互作用を通じて交換される資源であるという観点から、その双方向的な特質に注意が向けられるようになってきている (Gottlieb, 1984; Shumaker & Brownell, 1984)。このような流れの中から、他者に提供するサポートの役割に焦点を当てた研究がいくつか見受けられるようになってきた (蜂屋, 1990; Jung, 1988; Spiegel, 1982)。例えば、蜂屋 (1990) は、大学生を対象にして、他者に提供するサポートと大学満足感および孤独感との関連を検討し、他者に提供するサポートが大学生活に対する満足感を高め、孤独感を低下させる効果をもつことを見出した。また、Spiegel (1982) は、他者に提供するサポートが自己価値の感情を高めるといった心理的報酬となることを指摘している。

こうした研究のほかに、最近では、サポートの送り手と受け手の双方の視点に立ち、平衡理論 (Hatfield, Traupmann, Sprecher, Utne, & Hay, 1985) を応用することによって、サポートの互恵性と心身の健康との関連を検討した研究も数多く見受けられるようになってきた (Antonucci & Jackson, 1990; Buunk, Doosje,

Jans, & Hopstaken, 1993; Levitt, Guacci, & Weber, 1992; Rook, 1987)。ここでいうサポートの互恵性とは、ある個人が他者から受け取ったサポートと同じ程度のサポートを他者に返報することを意味している。Rook (1987) や Buunk et al. (1993) など先行研究の多くからは、サポートの互恵性が高いほど、すなわち、受け取るサポートと与えるサポートが同程度であるほど、心身の健康状態が良好であるということが示されてきた。

ところで、Antonucci & Jackson (1990) によれば、ソーシャル・サポートの交換は、個人の特定の発達段階 (intraindividual development) と二者間の関係の特定の進展段階 (interindividual development) によって決定される。例えば、若い母親と新生児との関係では、より進んだ発達段階にある母親は、他者との社会的関係の長い歴史をもち、これから進展していく子どもとの関係に対して特定の期待を抱く。一方、発達段階の初期にある新生児は、対人関係の先行経験がなく、遺伝的に備わっているものを除いて親との関係に対して期待を抱かない。すなわち、両者はそれぞれが異なる発達段階で関係に参加している。それと同時に、その関係は、両者にとって新しいものである。その関係自体は関係進展の初期段階にあると見なされる。こうした個人内発達と個人間進展の概念は、社会的関係での互恵性の評価に影響を与えたり、ある

いは逆に影響を受けたりする。

サポートの互恵性と心身の健康との関連に対する個人内発達の影響については、Levitt et al. (1992) および Taniguchi & Ura (2002) によって検討されている。Levitt et al. (1992) の研究では、親子関係における世代間のサポート交換が、成人女性、母親、祖母の三世代のサンプルにおいて評定された。その結果、真ん中の世代の母親と娘との関係におけるサポートの互恵性のみが、関係満足感を通じて心身の健康と有意な関連をもっていた。また、Taniguchi & Ura (2002) は、小学生と高校生を対象にして、友人関係におけるサポートの互恵性と抑うつとの関連について検討を行った。その結果、小学生よりも高校生において、サポートの互恵性が抑うつと有意な関連をもっていた。これらの研究結果は、親子関係や友人関係におけるサポートの互恵性と心身の健康との関連が、個人の特定の発達段階によって影響を受けることを示すものである。

一方、サポートの互恵性と心身の健康との関連に対する個人間進展の影響については、それを実証的に示した研究はほとんどない。しかし、衡平理論を友人や夫婦関係に適用して、衡平性（一方の投入と結果の比率が他方のそれと等しい状態）と関係満足感や関係安定性との関連を検討した研究の中で、個人間進展の要因を考慮に入れた研究がいくつか存在する（Lloyd, Cate, & Henton, 1982; 諸井, 1989; 諸井・小川, 1987; 中村, 1990）。Lloyd et al. (1982) は、男女大学生を対象にして、親密な関係よりも付き合いの浅い関係の方で、衡平性が TMI (Total Mood Index: 満足感+幸福感-怒り-罪悪感) と有意な関連をもつことを見出した。同様に、諸井・小川 (1987) も、女子大学生を対象にして、交際期間が長い関係よりも短い関係において、異性親友との関係が衡平であるほど満足感や幸福感が高まるという結果を得た。これらの結果は、関係進展の初期段階の方が、衡平性と関係満足感との関連が強いことを示している。これに対して、諸井 (1989) や中村 (1990) の研究では、付き合いの長い関係の方が、衡平性と関係満足感の関連が強くなるという結果が得られている。諸井 (1989) は、男女大学生を対象にして、関係の初期段階よりも関係が進んだ段階の方が、同性親友との衡平性が二者関係の安定性と関連をもつことを見出した。また、中村 (1990) も、大学生を対象にした縦断的研究から、親密性が低い関係よりも親密性が高い関係において、同性親友との関係が衡平であるほど関係継続意志が高まることを明らかにした。

以上のように、衡平理論を友人や夫婦関係に適用した研究からは、関係の初期段階あるいは進展した段階のいずれであれ、関係の進展段階が衡平性と関係満足感あるいは関係安定性との関連に影響を与えることが

示されている。そこで、本研究では、個人間進展すなわち関係の進展段階が、友人関係におけるサポートの互恵性と心身の健康との関連に対してどのような影響を与えているかについて縦断的手法を用いて検討する。上述したように、衡平理論を親密な関係に適用した研究では、関係の初期段階で交換原理が当てはまることを指摘した研究がある一方で、関係が進展した段階で交換原理が適用されることを示した研究も存在する。従って、本研究では、個人間進展の影響に関して特定の仮説を設定せずに、友人関係におけるサポートの互恵性と精神的健康との関連が、関係の進展段階によってどのように変化するかを探索的に検討することを主要な目的とする。調査対象者には、個人内発達の影響を検討した Taniguchi & Ura (2002) と同様に、小学生と高校生を取り上げる。これら二つのサンプルを対象にすることによって、サポートの互恵性と精神的健康の関連に対する個人間進展の影響と個人内発達の影響を総合的に検討することが可能になると考え

方 法

調査対象者と調査手続き

公立高校の1年生242名（男子114名、女子128名）と公立小学校の6年生124名（男子57名、女子67名）が調査に参加した。各学級担任の先生が、ホームルームや放課後の時間を利用して調査を実施した。調査は、1学期（5月下旬～7月中旬）と3学期（2月下旬～3月中旬）の2回にわたって行われた。

調査内容

調査用紙には、フェイスシートに記載された回答者の個人的属性を質問する項目のほかに、以下に挙げる尺度が含まれていた。第1回目および第2回目調査ともに、同一の尺度が使用された。

友人からのサポート受領尺度 岡安・嶋田・坂野 (1993) が作成した16項目からなる中学生用 SESS 尺度 (the Scale of Expectancy for Social Support for Junior High School Students) の中から、因子負荷量を考慮して、道具的サポート3項目、情緒的サポート3項目を採用し、合計6項目からなるサポート受領尺度を作成した。中学生用尺度を用いた理由は、小学生と高校生の二つのサンプルの結果を比較する際に、尺度に含まれる項目の内容や表現が同一である方が望ましいと判断したためである。被調査者は、最も親しい友人を1人選択し、その友人から最近数か月の間にどの程度のサポートを受け取ったかについて各項目に回答をした。回答は、“よくあった (4点)” から “まったくなかった (1点)” までの4件法であった。各項目の得点を合計して、サポート受領得点を算出した。

Table 1
Means and standard deviations of support given to friend,
support received from friend, and stress responses

	The first term	The third term
Elementary school students		
Support given to friend	16.71 (3.79)	16.98 (4.14)
Support received from friend	17.05 (4.31)	17.46 (4.49)
Stress responses	37.25 (12.08)	36.79 (12.35)
High school students		
Support given to friend	17.18 (3.88)	16.28 (4.17)
Support received from friend	17.19 (4.42)	16.57 (4.64)
Stress responses	42.82 (11.88)	46.48 (13.31)

Note. Sample size ranges from 103-112 for elementary school students; 227-231 for high school students. Numbers in parentheses are standard deviations.

第1回目と第2回目調査で同じ友人を評定対象とした。 α 係数は、小学生の1回目調査が.84, 2回目が.88, 高校生の1回目調査が.88, 2回目が.90であった。

友人へのサポート提供尺度 サポート受領尺度の6項目について、それぞれの項目が友人に対するサポート提供を表すように表現を変更したものをサポート提供尺度として用いた。各項目の得点を合計して、サポート提供得点を算出した。 α 係数は、小学生の1回目調査が.82, 2回目が.87, 高校生の1回目調査が.86, 2回目が.89であった。

ストレス反応尺度 三浦・福田・坂野(1995)によって作成された中学生用ストレス反応尺度の中から、因子負荷量を考慮して、20項目を選択して用いた¹。小学生と高校生の結果を比較するために、サポート尺度と同様に、ストレス反応尺度も中学生用を用いた。被調査者は、各項目によって示されている気持ちや体の調子が、最近の自分にどの程度当てはまるかに基づいて、評定を行った。評定方法は、“まったく違う(1点)”から“その通りだ(4点)”までの4件法であった。各項目の得点を合計してストレス反応得点を算出した。得点が高いほどストレス反応の程度が高いことを示す。 α 係数は、小学生の1回目および2回目調査が.91, 高校生の1回目調査が.91, 2回目が.92であった。

¹ 三浦他(1995)のストレス反応尺度には、“不機嫌・怒り”や“抑うつ・不安”といったネガティブな感情を測定する項目が含まれている。また、Buunk et al. (1993)は、サポートの互恵性がネガティブな感情(いらいらや抑うつなど)と関連をもち、両者の関連が仕事上のストレスラーとは無関係であることを見出している。これらのことから、サポートのやりとりが互恵的でない状態、すなわち、利得過剰や利得不足の状態をストレスラーとして想定することが可能である。

Table 2
Range of reciprocity score

Groups	Range
GUB (Greatly under benefited)	$x \leq -3$
SUB (Slightly under benefited)	$-2 \leq x \leq -1$
RET (Reciprocally treated)	$x = 0$
SOB (Slightly over benefited)	$1 \leq x \leq 2$
GOB (Greatly over benefited)	$3 \leq x$

Note. x =reciprocity score.

結 果

各尺度得点の時間的推移

各尺度得点の平均値と標準偏差をTable 1に示す。1学期と3学期における各尺度得点の平均値の差の検定を行った結果、高校生のサポート提供($t(215) = 3.29, p < .01$), サポート受領($t(216) = 2.28, p < .05$), ストレス反応($t(218) = -5.92, p < .01$)についてそれぞれ有意差が認められた。すなわち、高校生では、1学期よりも3学期において、サポート提供とサポート受領が減少し、ストレス反応が増大する傾向がみられた。

サポートの互恵性とストレス反応との関連に対する個人間進展の影響

各調査時点ごとに、サポートの互恵性とストレス反応との関連を検討するために、互恵性の程度を変動因として傾向分析を行った。傾向分析は、分散分析における級間平方和を傾向成分(1次傾向, 2次傾向など)に分割して、各傾向の有意性を検討するものである(岩原, 1965)。この分析を用いることによって、サポートの互恵性とストレス反応との関連が、直線的な関

Table 3
Relationship between reciprocity/nonreciprocity and stress responses

Reciprocity/Nonreciprocity	Elementary school students				High school students			
	The first term		The third term		The first term		The third term	
	<i>n</i>	Stress responses	<i>n</i>	Stress responses	<i>n</i>	Stress responses	<i>n</i>	Stress responses
GUB (Greatly under benefited)	12	40.58	19	41.89	37	43.73	24	51.63
SUB (Slightly under benefited)	15	34.07	18	35.46	39	42.21	39	45.95
RET (Reciprocally treated)	23	33.57	26	35.18	58	43.33	75	44.92
SOB (Slightly over benefited)	25	40.56	26	34.03	55	42.80	52	45.42
GOB (Greatly over benefited)	21	40.43	19	36.88	34	40.62	37	47.03
Source	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values
Between	4	1.83	4	1.42	4	.39	4	1.28
Linear trend	1	.42	1	1.85	1	.83	1	1.70
Quadratic trend	1	3.56	1	3.40	1	.19	1	3.99*
Cubic trend	1	2.16	1	.07	1	.56	1	.29
Within	91		103		218		222	

* $p < .05$.

係（1次傾向）にあるのか、あるいは、曲線的な関係（2次傾向）にあるのかを検討することができる。まず、サポート受領得点からサポート提供得点を引いて互恵性得点を求めた。この得点が0である場合は、友人から受け取るサポートと友人に提供するサポートが等しいこと（互恵的な関係）、正の値の場合は、提供するサポートよりも受け取るサポートが多いこと（利得過剰）、負の値の場合は、受け取るサポートよりも提供するサポートが多いこと（利得不足）をそれぞれ表している。次に、この互恵性得点に基づいて、被調査者を、極端な利得過剰、若干利得過剰、互恵的關係、若干利得不足、極端な利得不足の5群に分類した。各群への振り分けの基準は、Table 2に示す通りである。利得過剰および利得不足な関係を、それぞれ極端群と若干群の2群に細分化するに当たっては、各群に含まれる人数比が概ね等しくなるように基準値を設定した。互恵性得点を独立変数、ストレス反応を従属変数として傾向分析を行った結果をTable 3に示す。小学生では、1学期および3学期のいずれの時点においても、互恵性はストレス反応と有意な関連をもっていなかった。一方、高校生では、1学期の時点では、互恵性とストレス反応との間に有意な関連は認められなかったが、3学期の時点では、有意な2次傾向が認められた（ $F(1, 222) = 3.99, p < .05$ ）。そこで、高校生の3学期の時点におけるサポートの互恵性とストレス反応との関連をFigure 1に図示した。図から明らかとなおり、友人との関係が互恵的であるほどストレス反応が低かった。以上の結果から、小学生より

Figure 1. Reciprocity/nonreciprocity and stress responses among high school students at the third term.

も高校生において、サポートの互恵性とストレス反応との関連に対する個人間進展の影響が認められた。すなわち、高校生において、友人との関係が短いときよりも長いときに、サポートの互恵性がストレス反応と関連をもっていた。また、サポートの互恵性とストレス反応との関係は、U字型の2次関係であり、サポートが互恵的であるほど、ストレス反応の程度が低下していた。

考 察

本研究の結果は、個人間進展が友人関係におけるサポートの互恵性とストレス反応との関連に影響を与えていることを示した。高校生において、1学期の時点

では、サポートの互惠性がストレス反応と関連をもっていなかったが、3学期の時点では、両者の間に有意な2次関係が認められた。すなわち、友人関係が長期的になるにつれて、互惠的なサポート授受がストレス反応を低下させるようになった。こうした結果は、衡平理論を友人関係に適用して、関係の初期段階よりも関係が進んだ段階で、衡平性と関係満足感との関連が強まることを示した中村（1990）や諸井（1989）の研究結果と一致するものである。高校生では、1人の友だちとの深い付き合いを求める傾向がみられることから（菅原，1985），関係が長期的になるにつれて、相手を唯一の親友であると強く意識するようになるために、利得不足や利得過剰といった互惠的でない状態がネガティブな感情を引き起こしやすくなるのではないかと考えられる。

本研究の結果では、高校生において個人間進展の影響が認められたが、小学生では認められなかった。すなわち、小学生においては、1学期および3学期のいずれの調査時点においても、サポートの互惠性がストレス反応と有意な関連をもっていなかった。両者の間には2次関係に近い傾向は認められたが、互惠群のストレス反応が最も低く、極端な利得不足群および極端な利得過剰群のストレス反応が最も高くなるようなU字型の2次関係ではなかった。児童期では、青年期と比べて、友人関係における互惠性が重要視されることが少なく（楠見・狩野，1986），友人との付き合い方が浅く幅広い（落合・佐藤，1996），特定の友人関係でのサポートの互惠性がストレス反応とつながり難いと考えられる。こうした理由から、サポートの互惠性とストレス反応との間に、有意な2次関係が認められなかったのであろう。小学生では、ある程度時間が経過した後も、互惠性の重要性や友人との付き合い方に大きな変化が生じないことを本研究の結果は示唆している。

サポートの互惠性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響を検討したTaniguchi & Ura（2002）の結果を踏まえると、友人関係におけるサポートの互惠性が精神的健康と関連をもつようになるには、まず第一に個人内の発達段階が進展していること、次いで、友人関係自体が進展していることが必要であると言えよう。

最後に、本研究の結果が臨床的あるいは教育的介入に対してどのような示唆を与えることができるかについて述べる。本研究の結果から、高校生の長期的な友人関係では、サポートのやりとりが互惠的であるほど、ストレス反応が低いことが明らかになった。また、高校生では、友人関係が長期的になるにつれて、主張スキルや共感スキルといった社会的スキルがサポートのやりとりを強く規定するようになる（谷口，2001）。これらのことから、サポート授受のバランス

が悪く、ストレス反応を多く表出している生徒に対しては、友人関係が利得過剰であれば共感スキルを、利得不足であれば主張スキルを獲得できるように援助し、サポート授受のバランスを適切な状態にすることによって、ストレス反応を軽減することができると考えられる。

引用文献

- Antonucci, T. C., & Jackson, J. S. 1990 The role of reciprocity in social support. In B. R. Sarason, I. G. Sarason & G. R. Pierce (Eds.), *Social support: An interaction view*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 173-198.
- Barrera, M., Jr. 1986 Distinction between social support concepts, measure, and models. *American Journal of Community Psychology*, **14**, 413-445.
- Buunk, B. P., Doosje, B. J., Jans, L. G. J. M., & Hopstaken, L. E. M. 1993 Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 801-811.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Social support, stress, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.
- Gottlieb, B. H. 1984 Theory into practice: Issues that surface in planning interventions which mobilize support. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (Eds.), *Social support: Theory, research and application*. The Hague, the Netherlands: Martinus Nijhoff. Pp. 417-437.
- 峰屋良彦 1990 ソーシャル・サポートと適応 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 54-55. (Hachiya, Y. 1990 Social support and adjustment. *Proceedings of the 31st Annual Conference of the Japanese Society of Social Psychology*, 54-55.)
- Hatfield, E., Traupmann, J., Sprecher, S., Utne, M., & Hay, J. 1985 Equity and intimate relations: Recent research. In W. Ickes (Ed.), *Compatible and incompatible relationships*. New York: Springer-Verlag. Pp. 91-117.
- 岩原信九郎 1965 教育と心理のための推計学 新訂版 日本文化科学社 (Iwahara, S. 1965 *Inferential statistics for education and psychology*. 2nd ed. Tokyo: Nihonbunkakagakusya.)
- Jung, J. 1988 Social support providers: Why do they help? *Basic and Applied Social Psychology*, **9**, 231-240.
- 楠見幸子・狩野素朗 1986 青年期における友人概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, **31**, 97-104. (Kusumi, S., & Kano, S. 1986 Developmental change in adolescent conceptions of friendship.

- Research Bulletin of Educational Psychology, the Faculty of Education, Kyushu University*, **31**, 97-104.)
- Levitt, M. J., Guacci, M., & Weber, R. A. 1992 Inter-generational support, relationship quality, and well-being: A bicultural analysis. *Journal of Family Issues*, **13**, 465-481.
- Lloyd, S., Cate, R., & Henton, J. 1982 Equity and rewards as predictors of satisfaction in casual and intimate relationships. *Journal of Psychology*, **110**, 43-48.
- 三浦正江・福田美奈子・坂野雄二 1995 中学生の学校ストレスとストレス反応の継続的变化 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 106-107.
(Miura, M., Fukuda, M., & Sakano, Y. 1995 Successive changes of school stressors and stress responses in junior high school students. *Proceedings of the 36th Annual Meeting of the Japanese Association of Educational Psychology*, 106-107.)
- 諸井克英 1989 対人関係への衡平理論の適用(2)——同性親友との関係における衡平性と情動的状态—— 実験社会心理学研究, **28**, 131-141.
(Moroi, K. 1989 An application of equity theory to interpersonal relations (2): Equity and emotional states in close relationships with same-sex friends. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **28**, 131-141.)
- 諸井克英・小川久美 1987 対人関係への衡平理論の適用——予備的検討—— 人文論集(静岡大学文学部社会学科・人文科学研究報告), **37**, 15-40.
(Moroi, K., & Ogawa, K. 1987 An application of equity theory to interpersonal relations: A preliminary study. *Studies in Humanities (Annual Reports of Departments of Sociology and Humanities, the Faculty of Humanities and Social Sciences, Shizuoka University)*, **37**, 15-40.)
- 中村雅彦 1990 大学生の友人関係の発展過程に関する研究——関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討—— 社会心理学研究, **5**, 29-41.
(Nakamura, M. 1990 A study on the developmental processes of friendship in college students: A comparative examination of social exchange models predicting relationship commitment. *Japanese Journal of Social Psychology*, **5**, 29-41.)
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友だちとのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
(Ochiai, Y., & Satoh, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302-312.
(Okayasu, T., Shimada, H., & Sakano, Y. 1993 Alleviation effects of social support on school stress in junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 302-312.)
- Rook, K. S. 1987 Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 145-154.
- Shumaker, S. A., & Brownell, A. 1984 A social psychological theory of social support. *Journal of Social Issues*, **40**, 11-36.
- Spiegel, D. 1982 Self-help and mutual-support groups: A synthesis of the recent literature. In D. E. Biegel & A. J. Naparstek (Eds.), *Community support systems and mental health*. New York: Springer. Pp. 98-117.
- 菅原健介 1985 青少年の友人関係の発達的变化と構造 東京都生活文化局(編) 大都市青年の人間関係に関する調査——対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析—— 東京都生活文化局 Pp. 115-118.
(Sugawara, K. 1985 Developmental changes and structures of friendships among adolescents. In Bureau of Citizens and Cultural Affairs, Tokyo Metropolitan Government (Ed.), *An examination of human relations among adolescents living in a large city: An analysis from the viewpoint of relevance to the attenuation of personal relations*. Tokyo: Bureau of Citizens and Cultural Affairs, Tokyo Metropolitan Government. Pp. 115-118.)
- 谷口弘一 2001 サポートの互惠性と精神的健康の関連に関する研究——個人内および個人間発達の観点からの検討—— 広島大学大学院生物圏科学研究科博士論文(未公刊).
(Taniguchi, H. 2001 A study of the relationship between support reciprocity and mental health: An examination from the viewpoint of intra- and inter-individual development. (Unpublished Doctoral Dissertation of Hiroshima University))
- Taniguchi, H., & Ura, M. 2002 Support reciprocity and depression among elementary school and high school students. *Japanese Psychological Research*, **44**, 247-253.

——2001. 11. 16 受稿, 2002. 9. 7 受理——